MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．１．３０　発行元
第 442 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

天藤 真の代表作

今度は天藤真の代表作。私が学生の頃に魅力を感じた作家だが、今では人々の記憶から遠ざかりつつあるような気がしている。これからでも再評価されて当然の人。代表作三作をどれにするか考えてみた。

温かみのある本格ミステリ

天藤真作品のイメージとなると最初に思い浮かぶのは「極悪人は登場しないよな」ということ。多くの作品の登場人物は、人間味に溢れた温かい雰囲気の持ち主。弱い立場の人に注ぐ愛情の籠った視線。時にはユーモアミステリであったり、真面目な本格ものであったりと様々だが、読後はさっぱりした気持ちになることが多い。

代表作。『大誘拐』は誰しもが認める傑作。その次からが難しい。野球ミステリの『鈍い球音』はすでに取り上げた。（第３４９号）　『殺しへの招待』『死角に消えた殺人者』『陽気な容疑者たち』『皆殺しパーティ』…。横一線の気がして、決め手に欠ける。そこで、本そのものに特別な愛着がある『炎の背景』を二番目に。そしてアームチェア・ディテクティブの短編集『遠きに目ありて』を三番目に選んでみた。どちらも雑誌『幻影城』絡みである。

古書市場ではまだそれほど高くないようだし、数もある程度出回っているようなので、是非若い読者に読んでみてほしい作家である。派手さや奇抜さがあるわけではないけれども、良心的で丁寧な作りの作品であることを保証したい。

NO.3『遠きに目ありて』

１９８１年大和書房。探偵小説専門誌『幻影城』に連載された５編を集めた短編集。一番の特徴は探偵役が車椅子に乗った少年だということ。岩井信一君。重度の脳性まひでからだの自由が利かず、話ことばも慣れないと聞き取りにくい。でも、頭脳の回転は素晴らしい。与えられた情報から真実を見出す力を持っている。信一君と仲良くなったのは真名部警部。『遠きに目ありて』は信一君のアームチェア・ディテクティブぶりを表している。

第一話の『多すぎる証人』は、団地内での殺人事件。三号館の412号室の津見秀夫という人物がベランダで包丁で刺殺された事件。多くの住人が中庭から見上げていた中で起きたもの。さて、信一君の推理は…。

NO.1『大誘拐』

１９７８年カイガイ出版という小さな出版社から出た本。日本推理作家協会賞受賞作品。題名の通りの「誘拐もの」。当時としては型破りのびっくり仰天の内容だった。その後多くの作家が新機軸の「誘拐もの」に挑戦するようになったが、本書はそのきっかけにもなったような作品。映像化もされ、当時としては大いに注目を集めた。現在は創元推理文庫に収められている大傑作ミステリ。

冒頭では、和歌山県に住む大富豪・柳川とし子刀自が出てくる。８２歳。小柄な老婦人。でも元気はつらつで、久しぶりに持ち山の「山歩き」を計画する。四万ヘクタールもある持ち山を毎日歩いて見て回ろうというのだ。途中までは運転手がついていくが、山に入ると付き従うのは紀美という雇い人ひとり。このとし子刀自を誘拐しようと考えたのは戸並健次・秋葉正義・三宅平太の三人組。のちに「虹の童子」と名乗る三人組は同じ雑居房で過ごした仲間。戸並はとし子刀自が出資している施設「愛育園」で子ども時代を過ごしており、出所後社会復帰をする決意は持っていた。でも、三人組の構想とは全く違った展開で、大がかりな事件に発展していく。犯人との交渉も、１００億円の身代金の受け渡しもテレビ中継で行われることに…。

No.2『炎の背景』

１９７６年幻影城ノベルス。幻影城ノベルスの一番初期の本で、わざわざアンカットのフランス装を採用していた。「アンカット」というのは製本時に縁の裁断をしていないことで、ページが折りたたまれてくっ付いたままの形になっている。読む時には、ペーパーナイフを用意して、一枚一枚開いていく必要がある。私の手元にある本は、まだページを切り開いていない状態でそのまま取ってある。古書市場では２０００円の値がついているけれども、私の本はもう少し高く値がついてもいいような気がする。物語の中身の方はもう一冊買ってそちらの方で読んだので、ストーリーは理解している。

主人公は小川兵介。渾名は「おっぺ」。２２歳で廻りからはヒッピーと見られている。女性嫌悪症の持ち主。新宿の街で泥酔して意識を失ったのだが…。目覚めたところは那須茶臼岳の麓にある見知らぬ別荘の屋根裏だったのだ。その場で出会ったのが一木久留実。渾名は「ピンクル」。１９歳で、自分が女性であることを拒否している。そしてその傍には男の死体が転がっていた。誰かにしかけられた罠。「おっぺ」と「ピンクル」は気持ちが通じ合うのを感じ、死体を背負って抜け出す。その時別荘は大爆発を起こして…。